

ロシア語動詞における体の研究

—— 文法研究の対象としての接頭辞付加による体のペアについて ——

山 田 隆

ロシア語動詞の体の相関関係の問題に取り組んでいる現代の言語学者たちの間では、体のペア形成の本質は、имперфективацияの研究にあると見る学者がますます増えてきている。その中であって перфективацияによる体の形成を支持する研究者も少なくない。体のペアについての研究が、見方を異にするこうした対立状態にあり、そして、これらの対立を通して多くの問題点が解明されてきた経過を踏まえ、本論は、перфективацияの研究を取上げ、перфективацияのもつ問題点のいくつかについて検討する。¹⁾

動詞の体が、まだ明確に体系付けられていなかった初期の研究段階においては、多くの研究者が、動詞を類似の意味タイプによって分類し、これを以って体の体系とみなしていた。だが、この体系は、これまでの研究成果から考えると、動詞の文法的意味と語い的意味を混同したものであったから、文法体系と名付けるには余りにも煩雑な分類であった。体の文法的カテゴリーはロシア語動詞においては『完了体と不完了体とは対立をなすが、この対立においては完了体は一定の意味特徴をもつことによって不完了体から区別される』ものとして示される。²⁾ 従って、動作の「結果達成」、「完結性」そして「継続性」、「不定持続性」などの用語を用いた従来の定義は、全て、動作の個別的意味によって体の一般的意味特徴を説明する極めて不備な方法であった。³⁾

現在、体の一般的定義については、意見もほぼ出揃い、それらは、主として、動作の内的飽和を認めるヴィノグラードフと、動作の全一性を前面に押し出すマスロフ、イサチェンコとの対立に環元することができる。⁴⁾ いずれの定義がより本質的なものとして根拠付けられるかについては、尚、多少の時間を要するとはいえ、現在のアспект研究において一層現実的な意義を担っているのは、体の一般原理の問題ではなく、体の一般的意味と動詞語義の結合が実現される体の相関関係についての研究である。これは、体の一般的定義についての研究が、もはや有効性をもたなくなったことを意味するものではない。体の一般的意味をすなわちロシア語動詞の基底を構成する一定不変体として把握していても、発話に際しては、動詞の語い的意味によって基底となる意味の上に様々な意味の重層構造が構築されることになるので、体の文法的定義をおさえているだけでは体についての真の認識とはいえないのであり、それだけロシア語学の総合された研究が求められている証左といえる。体の文法的意味は、動詞構成要素の中では、いわば抽象的な、根幹の部分構成しているのであるが、それは、具体的な語い的意味と結びついてはじめて体の個別的意味として実現されることになる。従って、体の一般的意味の実現にあっては、動作事実との接点になる個々の動詞語義が重要な要素となり、特に、二つの動詞が文法的にも意味的にも競合する体のペア形成にあたっては、とりわけ関与する動詞語義の同一性をもっとも明瞭に第一面に押出されてくることになる。

本論に入る前にあらかじめ перфективация についての問題提起をしておこう。

1. ロシア語動詞の体のペアを形成する際、その形成基準を明確にすること。特に、体の文法的意味と動詞の動作様式とは、いかなる点で区別しなければならないのか。

2. перфективация の特性を明示すること。特に、完全に文法化された接頭辞は、存在するののかについて。

体の相関関係についての研究は、体の意味は動詞語義そのものに固有のものとする классификационная категория (クラス分けのカテゴリー) と、動詞は体によって変化し、時制、数の形態と同様、体という文法的形態を保有すると考える словоизменительная категория (語変化のカテゴリー) の主張をめぐって進められてきた。перфективация を主張する研究者は、無接頭辞の根源の不完了体動詞 (делать) と語い論的負荷を有していない、完全に文法化された接頭辞を付与して派生した接頭辞付の完了体動詞 (сделать) とは体のペアをなすと考える。⁵⁾

実際、ヴィノグラードフは、文法的意味だけが異なる動詞形態を形成する完全に体的意味をもつ接頭辞が存在することを主張している。その際、彼は、перфективация を遂行する接頭辞を二分類しながら、論証を展開する。すなわちヴィノグラードフは、完了体動詞を形成するが、体のペアは全くなさない接頭辞について述べた後、§42 では体の相関をなす文法化された接頭辞の存在について論述する。

大部分の動詞接頭辞は、接頭辞本来の意味を完全に保持しており、新しい語の形成手段として作用する。これらの接頭辞によって付与される完了体の意味は、厳密に定められた意味的内容の語幹と結合する際、接頭辞が語の意味的構成で作りだす語い変化の結果として現われる。しかしながら、いくつかの動詞接頭辞は、純粋に体的な接頭辞に転換し、完了体形成の、完全に文法化した手段として機能する。これらは、造語的接頭辞から形態形成の接頭辞となる。この一連の現象においては、二種の過程を区別しなければならない。ある場合には接頭辞の現実的意味の弱化、および消失が、所与の動詞の語い的意味の個別的变化の結果として現われることがある。この種の過程は、接頭辞を体の相関形成の接頭辞に変換するとは結論付けることができない。すなわち、同一の接頭辞が、他の動詞、他の動詞語幹との結合では接頭辞本来の現実的意味を保有しているからである。

例 { сниться — присниться
 грезиться — пригрезиться
 мириться — (примириться
 помириться
 бить — (прибить
 побить

他の場合では接頭辞の現実的意味の消失が、一定の形態論的構造、または語い論的構成の動詞にとって規則的、必須のものとなる。ここで接頭辞の完了体形成の接頭辞への変換について語るができる。このような形態形成の接頭辞として、何よりもまず、接頭辞 о- と по- がある。⁶⁾

ヴィノグラードフは、最も生産的な о-, по- に始まり、本来の意味をほとんど失わない接頭辞まで、例語とともにこの種の接頭辞を 17 挙げている。

1. о- (無接頭辞の、または名辞派生の動詞に生産的な接頭辞)

дичать — одичать, слабеть — ослабеть, радоваться — обрадоваться, пустеть — опустеть и др.

2. по- (全ての品詞から派生の生産型)
бледнеть — побледнеть, любить — полюбить, благодарить — поблагодарить,
обедать — пообедать, нравиться — понравиться и др.
3. с- (やはり生産型)
делать — сделать, петь — спеть, прятать — спрятать, терпеть — стерпеть,
шить — сшить и др.
4. за- (接頭辞の形式化が稀)
арестовать — заарестовать, свидетельствовать — засвидетельствовать и др.
5. 6. 7. на-, вз-, у- (接頭辞の形態化が不完全なもの)
писать — написать, именовать — наименовать и др.
пользоваться — воспользоваться, волноваться — взволноваться и др.
топить — утопить, совершенствовать — усовершенствовать и др.
8. из-
печь — испечь, пугать — испугать и др.
9. вы-
купаться — искупаться и выкупаться, (см. Авилова Н. С., 1976: корчевать —
выкорчевать, стирать — выстирать, пить — выпить и др.)
10. при-
готовить — приготовить (но ср. готовить), сниться — присниться и др.
11. раз-
веселить — развеселить, сердить — рассердить и др.
12. 13. 14. 15. 16. 17. про-, пере-, до-, над-, под-, от-, крестить — перекрестить,
мстить — отомстить, (В. В. Виноградов совсем не дает примеров приставок
про-, до-, над- и под-. Ср. примеры, данные Н. С. Авиловой: бурить — про-
бурить, читать — прочитав и др.; ковать — подковать (лошадь), мести —
подмести (пол), итожить — подытожить и др.)

ヴィノグラドフが唱えたこの二分法は、その後、アヴィロワによって полная аспектуализация приставки, неполная аспектуализация приставки (接頭辞の完全アспект化, 不完全アспект化) という形で換骨奪胎して再現されることになったと筆者はみている。アヴィロワは、次のように述べる。

接頭辞は、所与の体のペアにおいて動詞の体の意味だけを変更する完全にアспект化された接頭辞となり得る。少数の動詞に接頭辞のアспект化がおこる、というのでは意味がない。重要なのは、接頭辞が無接頭辞動詞に完了体の意味だけをもたらすことである。

делать — сделать, пахать — вспахать

その他の場合、接頭辞のアспект化は不完全である。体のペアにおいて、完了体動詞は、完了体の意味ばかりでなく、意味をもつ接頭辞の保持された付加的意味を持ち込むことによっても、無接頭辞の不完了体動詞と区別される。

редактировать — отредактировать, стирать — выстирать, купать — выкупать, читать — прочитать⁷⁾

これらの接頭辞が、何故特定の動詞としか結合しないのかについては、動詞語義と接頭辞のもつ意味からの類推、そして伝統によるとアヴィロフは述べている (там же, стр. 155) が、この解釈だけでは перфективация を支える根拠が薄いように思われる。たとえば、接頭辞の結合例が動詞によって異なり、しかも、体のペアを形成する同一の接頭辞でも動詞が異なると、たちまち接頭辞本来の意味が出現する点を取り上げても、これは派生の生産性、規則性の観点から文法体系を検討する場合、充分正当化される現象とは言い難い。動詞 писать に対して А. А. Зализняк の『ロシア語文法辞典』は、за-, на-, в-, над-, под-, пере-, при-, о-, до-, по-, про-, с-, рас-, ис-, от-, у-, вы- の 17 個の接頭辞付加による完了体動詞を記載している。基本語義の «изображать какие-н. графические знаки на чем-н.; составлять какой-н. текст, сочинять, создавать какое-н. словесное произведение» は、派生した全ての完了体動詞が持っているが、完了体の限定された個別の意味は各々に異なる。この 17 個の完了体から、一体何の意味を基準にして体のペアの相関上 писать に対応する動詞を決定するのであろうか。このような状態にあっては、писать に対する接頭辞 на- のような、いわゆる文法的指標としての意味しか担わない接頭辞が果たして存在可能なのか、という疑問が解消したとは思われない。

チェコのスラヴィスト、コペチニーは、カルツェフスキィ、そしてマスロフとの体のペアをめぐる論争の中で、перфективация による体の相関を再評価している。カルツェフスキィとの論争で、コペチニーは、接頭辞としての意味的特徴をもつ接頭辞と体の意味を変えるだけの接頭辞の区別を設定し、マスロフとのそれでは、純粋に体的な接頭辞の設定理由として、1) 接頭辞付の完了体動詞から不完了体を派生させる必要性のないこと、2) 無接頭辞の不完了体と二次派生の不完了体に同義的關係、意味的一致が存在することを挙げている。前者について、不完了体動詞が形成された場合でも、これは имперфективация の一般的生产性、すなわち имперфективация の豊かな表現性、二次的体のペアでの不完了体の強調故におこるのであると考えた。また、後者の例語として близиться — приближаться の同義性を挙げる。

マルク・ヴェイも、付加的意味をもたない接頭辞は、動詞語義が接頭辞と意味的に一致する動詞と結合した時に生ずると述べ、接頭辞付加による перфективация の体のペア形成を支持している。

долбить — продолжать
корчевать — выкорчевать
пахать — вспахать

体のペアを形成する方法は、三つの類型に大別される：перфективация (完了化)、имперфективация (不完了化)、суплетивизм⁸⁾。

体のペアを形成する動詞は、その形成方法にかかわらず、何よりも、動詞語義の同一性が条件付けられる。すなわち、体のペアを形成するに際して、対応する動詞形態は、動作意味を変えずに、体という文法的意味だけを変更することが、体のペアの適否を判定する第一の基準である。動作を一つのまとまったものとして把握する体の一般的意味は、ここでも有効な文法的意味として機能することになる。動詞語義の同一性を考慮する場合、перфективация を支持する言語学者は、「動作の結果達成」を接頭辞がもつ体の第一の文法的意味としてとらえ、делать — сделать, читать — прочитать などの体のペアを挙げるが、筆者は、動作の結果達成の意味が体の文法的意味であるとする見方にはどうしても同意することができない。

нравиться — понравиться, идти — пойти のように状態の発生, 動作の開始を表わす動詞に動作の結果達成の意味を押しつける解釈は, 明らかに誤っており, 仮にこれらの動詞に他の意味を付与したとしても, このような体の個別の意味, 動作様式の意味によって体の文法的意思を十全に言い尽くすことは, 到底不可能であると考えらるからである。「動作の結果達成」「完成」などの概念は, 体の個別の意味特徴であることは, 体の一般的意思をめぐる論争の中でも筆者の支持する多くの研究者が, 繰返し強調してきたことである。従って, 「動作の結果達成」の概念に支えられた *делать — сделать* タイプの無接頭辞動詞と接頭辞付動詞が, 体のペアを形成することについては大いに疑問がもたれる。

「動作の結果達成」を体の個別の意味と述べたが, この種の意味分類は, 多くの研究者が行なってきたように, 動作様式の意味に帰属させることができる。アヴィロワは, 動作様式を, 「時の」, 「数量の」, 「特殊—結果の」動作様式に大分し, 各々下位分類を行なっている⁹⁾が, これは体の相関関係とは動詞意味の分類以外何ら関係がない。

周知の通り, 動作様式は動作を語義的に同類型の項目に分類しただけであるから, 同項目内の動詞が体のペアを必ずしも形成するわけではなく, ましてや, 体の対立の一般的図式の項目の動詞が互いに体のペアを形成するわけでもない。体のペア形成と動作様式の形成とは, 全く異なるカテゴリーなのである。動作様式は, 動詞語義によって, その意味特徴によって整理分類したもの, すなわち動詞の意味そのものと深く結びついているのであるから, 文法的特性を取扱う体のカテゴリーとは明確に区別して取り組む必要がある。

ところが, *делать* と *сделать* タイプの動作が体の相関関係を組まないのなら, この動詞に対していかなる形態の動詞を関係付けるべきかという疑問が起こるかもしれない。この点についてシャキロヴァは答える。

接頭辞付の完了体動詞に二次派生の不完了体動詞が欠如していることは, つまり, この動詞が無接頭辞詞との結合において体のペアを形成することの指標である。¹⁰⁾

ロシア語動詞である限り, 体のカテゴリーに関与しない動詞は一つとして存在しない。だが, このことは全ての動詞が体のペアを形成することを表わしているのではない。不完了体, または完了体だけの体のペアを形成しない単体動詞も, ペア動詞に劣らず数多く存在するのである。と同時に, 体についての研究が進むにつれ, アヴィロワのいう完全に文法化されていない接頭辞による体の不完全ペアが, 予想以上に多いことに気付く。だが, *написать* に対して果たして *написывать* は存在しない動詞だろうか。逆に, **сделывать* が認められていないから *делать — сделать* を機械的に体のペアの枠組に組み入れるべき理由はどこにも見当たらないはずである。この動詞は, なるほど, 体のペアとして慣用化されているが, 筆者の考えるところでは, これは結果達成の動作様式の一例であって, 体のペアを形成するものではない。すなわち, この動詞のもつ特性は, 意味的には近似するが, 体の対応しない動詞群に属すものと考えらる。筆者は, *делать — сделать, читать — прочитать* の他に, *писать — написать, учить — научить (выучить), нравиться — понравиться, казаться — показаться, идти — пойти* などの多くの類例を挙げることができる。

動作様式の意味が体のペアを形成すると考えらるる類例には, たとえば, 無接頭辞の不完了体動詞と一般的結果の意味をもつ接頭辞付の完了体動詞の相関関係 *писать — написать, читать — прочитать* のタイプが挙げらるる。このタイプの完了体動詞は, 結果の意味をもつことによって動作を名指すだけで, それを改変しない不完了体から常に区別される。大部分のロシア語動詞は結果達成の意味をもつことによって体のペアを形成することができる。従っ

て、一部のペア動詞の用法もまた、結果に対する動作の関係によって規定される。結果達成のニュアンスをもつペア動詞には、*решать — решить, объяснять — объяснить, добиваться — добиться* などがある。上述の二つのグループ間の主な差異は、ペア動詞 (*решать — решить*) では結果達成のニュアンスは両方の動詞に存在するが、動作様式によって相関する動詞 (*делать — сделать*) では結果達成の意味は完了体のみ現われる点にある。無接頭辞動詞と結果達成の意味の接頭辞をもつ動詞とが対立している文脈では、未完成の動作と完成した動作の意味が生ずるが、この意味は文脈によって作られるのであり、無接頭辞動詞そのものには結果達成への動作の指向性はない。

Я писал вчера статью весь вечер, но так и не написал ее. / Рассудова /
 昨晚ずっと論文を書いていたが、結局書き上げることができなかった。

ロシア語動詞にとって特徴的なのは、体のペアをなす両方の動詞が必ず補語と関係することである。無接頭辞動詞と接頭辞付の動詞はどうかというと、普通、補語に対する関係が互いに異なっている。すなわち、このタイプの完了体動詞は、必ず補語と結合しなければならないが、不完了体動詞は補語なしで用いることもできるのである。たとえば、無接頭辞動詞 *писать, учиться, читать, рисовать, делать, шить, готовить, стирать* などは、補語の有無に関係なく用いることができる。ここで不完了体動詞の場合における補語との結びつきの随意性は、結果に対する不完了体動詞の無特徴性、中立性の反映とみることができる。¹¹⁾

当初の課題を再度提起すると、問題は、*перфективация* に用いられる接頭辞は、体のペア形成に関する限り接頭辞本来がもつ意味論的特性は完全に消去され、接頭辞は体の変更という純文法的意味だけをもつ文法的指標とならなければならない、という点にあった。

この課題について筆者もいくつかの観点から答えてきた。まず、体のペア形成は、動詞語義の同一性が前提となることでその判定基準を示した。次に *перфективация* について、接頭辞のもつ文法的、語いの意味を各々検討した。接頭辞のもつ文法的意味の役割は、何らかの文法的意味によって完了体と不完了体とを区別することにあつた。そして、それに劣らず重要なことは、体のペアを形成する接頭辞は、語いの意味をもたないことである。言い換えるなら、体のペアを形成する接頭辞は、完全に文法化された指標でなければならない。そして筆者は、本論文において次の三点について *перфективация* による体のペア形成上の不備を指摘しようとしたのである。

1) 接頭辞のもつ文法的意味は、*В.В. Виноградов* や *Н.С. Авилова* 等の考えるような「動作の結果達成」の意味ではなく、「動作の全一的把握」の意味である。*перфективация* を支持する研究者が体のペアとして挙げる *звонить — позвонить* は「一回動作」の意味を、*нравиться — понравиться* は「状態の発生時点」の意味を、*гулять — погулять* は「時間的に限定された動作」の意味をもつ。

2) 「文法化された接頭辞」は、本質的に動詞語義そのものに依存しており、意味の相互浸透によって接頭辞の意味が消失したかと思われるにすぎない。接頭辞は、常に接頭辞本来の意味を保持しており、多かれ少なかれ所与の動詞に付加的意味を持込むことになる。そして、動詞の変化とともにたちまち接頭辞本来の意味が露呈されることこそ、完全に文法化された接頭辞が存在しないことの証左である。

3) 文法体系を派生の生産性、そして規則性の観点から検討した場合、すでに見た *перфективация* による動詞の体のペア形成は、接頭辞の組み合わせが動詞によって異なるという事実によって、*перфективация* を支持する上で不利な要素となってくる。

以上の点から、*перфективация* によって派生した完了体動詞では体の変更とともに意味の限定化、個別化がおこなわれており、接頭辞による新たな意味の獲得が進行しているとみなすことができる。こうした新しい意味の獲得を伴う接頭辞の造語作用は、接頭辞が完全に文法化されていない証しであり、*перфективация* による体のペア形成が一般化されない要因もここにあると考える。結局、*перфективация* による体のペア形成の問題に関する限り、*перфективация* は真の体のペアを形成するものではないと結論付けることができる。

注

- 1) 筆者は、誤解の生じないように *перфективация*, *имперфективация* の術語を原語で用いることにする。*перфективация* は、「接頭辞、または接尾辞 *-ну-* を動詞語幹に付加して不完了体動詞から完了体動詞を形成すること」の意味で用いられ、*делать — сделать*, *строить — построить*, *прыгать — прыгнуть* などの例語が挙げられるが、本論文で接頭辞 *-ну-* については検討しない。一方、*имперфективация* は、「接尾辞 *-ыва-* (*-ива-*), *-á-* (*-я-*), *-ва-*, *-ева-* の助けによって完了体動詞から不完了体動詞を形成すること」であり、*снабдить — снабжать*, *пленить — пленять*, *дать — давать*, *затмить — затмевать* などの例語を挙げることができる。上記の接尾辞のうち *-ыва-* (*-ива-*), *-ва-*, *-а-* の接尾辞の付加による不完了体動詞の形成を特に *имперфективация вторичная* と呼ぶ。*дорисовать — дорисовывать*, *задержать — задерживать*, *встать — вставать*, *наступить — наступать* и др.
- 2) О. П. Рассудова, Упорбление видов глагола в русском языке, М., 1968, стр. 5.
- 3) См. исторический обзор исследования по глагольному виду: В. В. Виноградов, Русский язык, М., 1972, стр. 379 и др. А. В. Бондарко и Л. Л. Буланин, Русский глагол, Л., 1967, стр. 30-31.
- 4) В. В. Виноградов, Русский язык, стр. 391-394, особенно см. стр. 394. А. В. Исаченко, Грамматический строй русского языка в сопоставлении со словацким, Братислава, 1965, стр. 130-136.
- 5) Тщательное исследование по вопросу видовой пары недавно опубликовано Н. С. Авиловой. См. подробнее: Н. С. Авилова, Вид глагола и семантика глагольного слова, Наука, М., 1976.
- 6) В. В. Виноградов, Русский язык, стр. 419-421.
- 7) Н. С. Авилова, Вид глагола и семантика глагольного слова, стр. 154-155.
- 8) *суплетивизм* は、*брать — взять*, *говорить — сказать*, *ловить — поймать* など、各々語幹の異なる二つの動詞の結合で、接頭辞付加、接尾辞付加に関係付けることのできない不規則な対立の動詞が含まれる。
- 9) Подробно см. Н. С. Авилова, Вид глагола и семантика глагольного слова, стр. 272, схему 2.
- 10) Л. З. Шакирова, Виды глагола в русском языке, Л., 1978, стр. 16.
- 11) Подробно см. О. П. Рассудова, Употребление видов глагола в русском языке, М., 1968.